

# 「自分自身への気付き」をはぐくむ生活科

## ～伝え合い交流の工夫によって～

中西 正子

昨年度の研究から学校提案「学びをデザインする子どもの姿」は「自分自身への気付き」と大きなかわりがあることがわかった。主体的に活動・体験できる単元構成、興味関心が持続する支援、振り返りのさせ方の工夫が不可欠であり、伝え合い交流する場面を充実させることが自分自身への気付きにつながった。

その伝え合い交流する場面を昨年度はグループで行なったが、本年度は一人ずつ行うことにした。一人ずつに発表の場面を与えることで、自分のよさや得意としていること、興味関心をもっていることがより明確になるのではないかと考えたからである。みんなの注目を浴び、聴いてもらい、おたずねをされる場面が個々に設定されていることによって、活動への意欲が高まり、伝え方の工夫が生まれ、「自分自身への気付き」が深まった。

キーワード： 学びをデザインする子どもたち、自分自身への気付き、伝え合い交流、おたずね、自分のよさ

### 1. 研究目的

#### 1. 1. 自分自身への気付き

昨年度の研究から学校提案「学びをデザインする子どもの姿」は生活科でいう「自分自身への気付き」と大きなかわりがあることがわかった。

まず、「自分自身への気付き」とは何か。学習指導要領解説生活編で次のように示されている。

- ① 集団生活になじみ、集団における自分の存在に気付くこと。同時に集団の中の友達存在にも気付くこと。
- ② 自分のよさや得意としていること、または興味・関心をもっていることなどに気付くこと。同時に友達のそれにも気付き、認め合い、そのよさを生かし合って共に生活や学習ができるようになること。
- ③ 自分自身の心身の成長に気付くこと。そしてその背後には、それを支えてくれた人々がいることが分かり、感謝の気持ちをもつようになること。

これらを実現するために、昨年度は主体的に活動・体験できる単元構成、興味関心が持続する支援、振り返りのさせ方に重点をおいて取り組んだ。一つの目的に向かって、みんなでつくり上げる学習活動の中で「自分はこう考えてこう動いた」とか「うまくいかなかったのでもう一度試してみよう」とか「次はこうすればどうだろうか」といった試行錯誤や「楽しんでもらえてうれしかった」といった達成感が見られた。

しかし、伝え合い交流する場面をグループで行なったために全体での練り上げが不十分になり、自分のよさ・友達のよさに気付くことが難しかった。

そこで、本年度は伝え合い交流する場面に重点をおき、一人ずつ発表させることで「自分自身への気付き」がより深められるのではないかと考えた。

#### 1. 2. 伝え合い交流の工夫

一人ずつ発表する場面を与えることで、自分に向き合うことが増える。どんな体験をしたか、どんなことがわかったか、どんなことを感じたか、その中から、何について伝えたいか、どんな方法で伝えようか。伝えるためのことば、よりわかりやすくするための写真や絵。すべて、自分が選んで自分がいいと思ったとおりに進めることができる。

それらをみんなに伝えたときにどんな反応がかえってくるか。どんなおたずねをされるか、それに対してどう答えるか。子どもたちが一人の発表に対して様々な角度から、感じ取り、思い巡らし、発言することで、その子のよさや得意としていること、興味関心をもっていることがより明確になるのではないかと考えた。

### 2. 研究方法

#### 2. 1. 「ひろがれ えがお

##### ぽかぽか大きくせん」

伝え合い交流を充実させるために、全員が同じ対象に向かって、夢中で体験をし、多くの気付きが生まれるようにしたい。

そこで、家族を対象にして「ひろがれえがお ぽかぽか大きくせん」という単元を組んだ。家族を対象にするよさは、誰もが毎日かわることができる点、各家庭によってかわり方に違いがあり話し合いに多様性が生まれる点、家族の感想をつぶさに聞くことができる点である。

またこれは、学習指導要領の内容(2)「家族と生活」、内容(9)「自分の成長」を中心に構成するものである。内容(2)にある「自分の役割を果たす」とは、自分

のことは自分でする、手伝いをする、家族が喜ぶことを見つける、家庭生活が楽しくなることを工夫するなどが考えられる。

家族をえがおにする(図1)ことをめあてに、「自分の役割を果たす」ことを計画的に実行する。そして家族に感想を聞いたり、友達と伝え合い交流したりしていく。そのことで、自分が家族の役に立っていることを実感したり、もっとやってみようと思いがわいたりするのではないかと考えた。



図1. 子どもたちがめざした家族の顔「えがお」

## 2. 2. 「ぼかぼか」

本学級では4月から、「ぼかぼか」が生まれるかかわり合いをめざしてきた。朝の会の先生の話では「ぼかぼか」した話を多く取り入れてきた。帰りの会では子どもたちが今日の「ぼかぼか」を伝え合うことになっている。

子どもたちの話し合いで、「ぼかぼか」とは、人のかかわりで生まれる「うれしい気持ち」「ありがとうって言いたくなる気持ち」「心にぱっと花が咲く感じ」と位置づけている。

本単元でも、家族が喜んでくれることを考え、くり返し働きかけることによって、家族の心も自分の心も「ぼかぼか」することに気付くであろうと考えた。

## 3. 単元の実際

### 3. 1. 単元の流れ

小単元名	主な学習活動
1. ぼくの家族はね・・・	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やったことのあるお手伝いを振り返ろう・・・①</li> <li>・家族にしてもらっていることを見つめよう・・・②</li> <li>・「ぼく・わたしの家族のぼかぼか」を発表しよう③</li> </ul>
2. ぼくがひろげるよ 家族のえがお	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族の笑顔をひろげるために自分にできることを考えよう</li> <li>・「ぼかぼか大きくせん」の計画を立てよう・・・④</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">                     各家庭で「ぼかぼか大きくせん」に取り組み、したことや思ったことをカードにかく・・・⑤                 </div>
3. みてみて！きいて！ ぼくのぼかぼか大きくせん	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ぼかぼか大きくせん」について振り返り、発表準備をしよう・・・⑥</li> <li>・「ぼかぼか大きくせん」について発表しよう。話し合おう。</li> <li>・家族からの手紙を読み、自分の思いも届けよう</li> </ul>

### 3. 2. 発表までの子どもたちの姿

一人で発表をするのが楽しみで仕方がないという気持ちにさせるために、そこにいたるまでの流れを大切にしました。やったことのあるお手伝いを振り返ったり(一①)、家族にしてもらっていることを見つめたり(一②)した。

子どもたちは、自分と家族とのかかわりを誇らしげに語り始めた。友達が楽しそうに話しているのを聞くと、「ぼくもね」「わたしもね」と表現したいことがあふれてきたようだ。これによって、家族の中での子どもの姿をみとることができた。

同時に、誰もが自分を語りたい気持ちをもっていると確信できた。してもらっていることの発表(一③)以上に、家族のためにしたこと発表は張り切って取り組むだろうと期待できた。

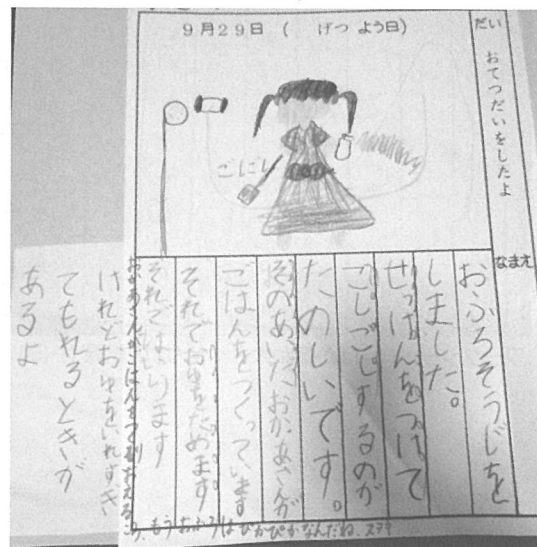


図2. やったことのあるお手伝いを振り返ろう(一①)

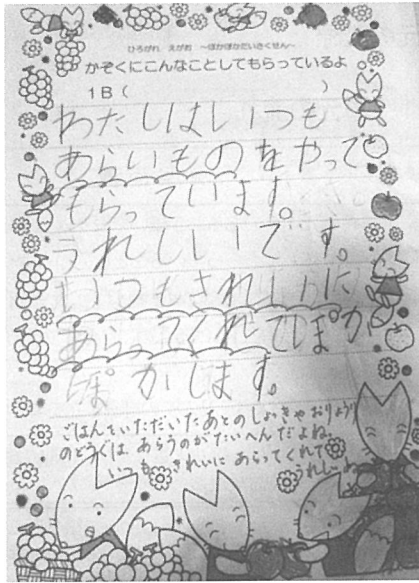


図3. 家族にしてもらっていることを見つめよう (一②)

こうして、「ぼかぼか大きくせん」の計画をたてる際(一④)には、発言やワークシートから個々をみとり、それを生かして一人一人に声をかけたり、励ましたりすることができた。

ぼかぼか大きくせんが始まると、子どもたちは与えられたワークシート(図4)にとどまらず、日記帳「みてみてきて」(図5)や家にある紙(図6)にも思いを書いてくるようになった。

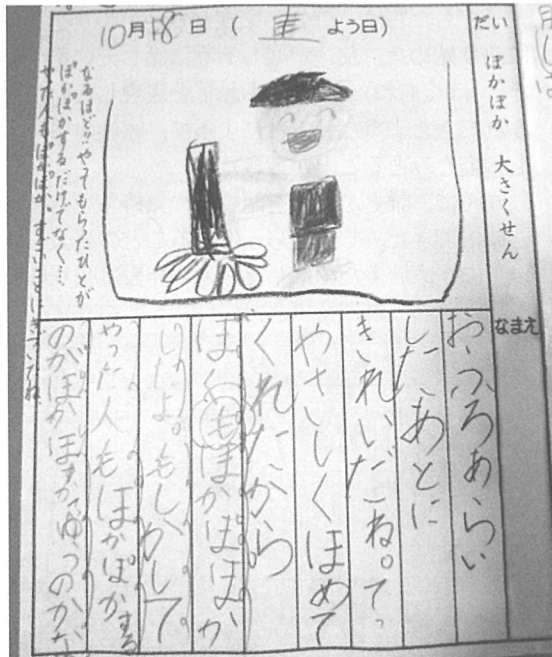


図4. ワークシートに「ぼかぼか大きくせん」の記録(一⑤)

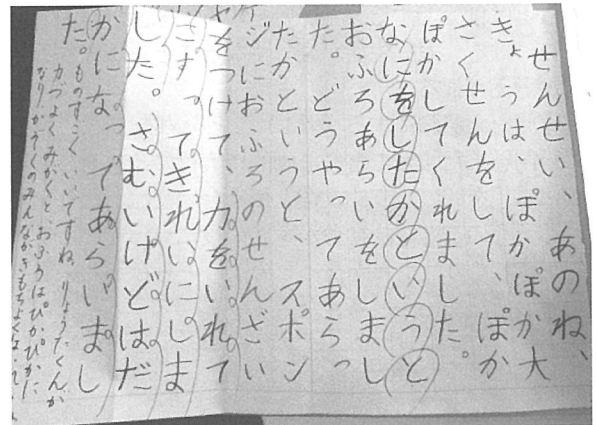


図5. 日記帳にも進んで書いてくるようになった(一⑤)

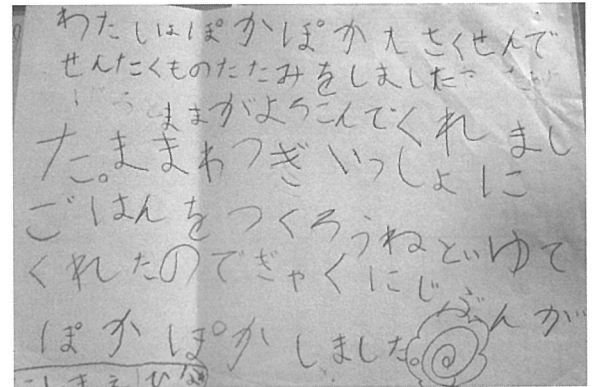


図6. 家にある紙に記録する子どもも出てきた(一⑤)

みんなに伝えたい気持ちが高まってきたところで、発表準備に入った(一⑥)。絵・写真・ビデオなどを効果的に使うよううながした。話す内容が決まれば、一人で練習→先生と練習→手直し→本番という手順をふんだ。

家庭にも協力を呼びかけたところ、子どもと相談しながら、写真や実物(調理器具、洗濯物、食器)などを持たせてくれた。

### 3. 3. 発表での子どもたちの姿

#### 3. 3. 1. 牧場で牛のお世話

ゆうきは家業のK牧場によく足を運び、日頃からお手伝いを楽しんでいる。

ゆうき ぼくのぼかぼか大きくせんは、成功しました。ぼくは一生懸命牧場のお手伝いを頑張っています。(写真を見せながら発表) この牛は種をつけることを頑張っています。ぼくはこの牛にえさをあげています。これは水を飲ませているところです。みんなで一緒に放牧させて、1頭ずつ水を飲ませてやります。来てくれる牛がみんな笑顔になります。

(乳しぼりの服装に着替える。ふ〜っと息を

入れて、手袋をはめる。) 次は搾乳です。最初に手でしぼって、そのあと機械につけます。(大きな牛の人形を出して) ここにお乳があります。こうやって乳を搾ります(図7)。(手つきを実演) 乳搾りは1年前からやっています。

(中略)

れん どうやって牛にえさをあげるんですか。  
 ゆうき 見えづらいけど(写真を指して)小屋のここにえさがあって、ここからあげます。  
 ひろき 牛にえさをやるのは大変ですか。  
 ゆうき 大変じゃないです。  
 あやか どうしてぼかぼか大きくせんを牛のお世話にしたのですか。  
 ゆうき 牛が大好きだからです。  
 しゅう なぜ牛には黒白の模様がついてるんですか?  
 ゆうき ホルスタインは黒白でいつも飲んでる牛乳です。ジャージは茶色で乳が濃いです。黒毛和牛は肉がおいしいです。  
 もも くわしいなあ。  
 こゆき もう博士になれるよ～。 (中略)  
 たくみ どうして1年前から、乳絞りをやっているんですか?  
 ゆうき それは牛と友達だからです。  
 けん それじゃあ、牛と会話できるの?  
 ゆうき できます。  
 なな 日本語でしゃべってくれるの?  
 ゆうき しゃべってはくれないけど、大好きみたいにぼくにキスをしにきます。



図7. わかりやすく発表するための工夫 (もの)

### 3. 3. 2. 卵焼き

黄色いフェルトを卵に見立てて、焼くところを実演しながら、こつなどを話した。

りょう おたずねはありますか?  
 みな なんで卵焼きに挑戦したんですか。  
 りょう お母さんに作ってと頼まれて、最初はお母さ

んに手伝ってもらったけど、ずっとやっていってたら、上手になってきました。

あき 何歳から卵焼きを始めたんですか。  
 りょう 4歳からです。  
 ひろき 卵焼きは大好きですか。  
 りょう はい。  
 れん ほかの料理も作っていますか。  
 りょう 作っています。  
 教師 どんなもの?  
 りょう オムライスです。  
 たけお なんで卵焼きが一番好きなんですか?  
 りょう 卵を食べたら元気がわくからです。  
 しんた なんで卵焼きをぼかぼか大きくせんにしたんですか?  
 りょう お母さんに喜んでもらえるからです。  
 ゆめ 何で卵焼きが焼けるようになりたいと思ったんですか?  
 りょう 焼けるようになったら、学校のお弁当に入れていけると思ったからです。  
 はな 前は卵焼きが嫌いって言っていたけど、何で好きになったんですか?  
 りょう 小さいころは嫌いだったけど、自分で焼いて食べたらおいしかったから、好きになりました。

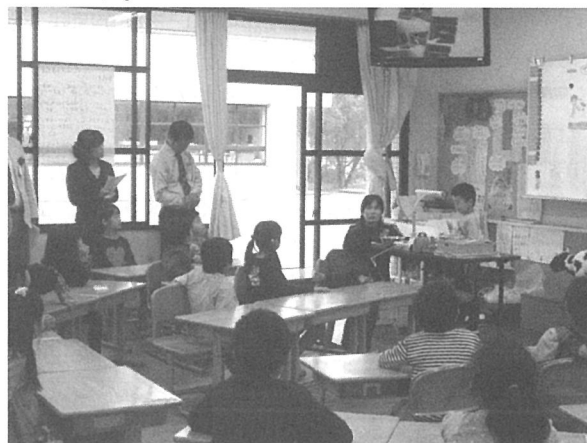


図8. わかりやすく発表するための工夫 (実演)

## 4. 単元の考察

### 4. 1. よさに気付く、認め合う

聞き手は、発表者に対して、「すごいね」というまなざしを注いでいる。新しいことを知る喜びがあったようだ。

わたしは、ゆうきくんが発表してくれて、牛のことをいっぱい教えてくれてうれしかったです。ゆうきくんは手袋をつけるとき、手袋に息をはいてたから、びっくりしました。ゆうきくんは乳をしぼるときの順番も教えてくれたので、うれしかったです。

一方、発表者はおたずねをされるたびに言葉を選びながら、張り切って答えている。答えながら牛や卵焼

きに対しての愛着を再確認している。聞き手からおたずねされることによって、自分の思いが引き出され、自分自身への気付きを生み出すきっかけになっているのである。

ぼくは発表をやってみて、本当に楽しかった。いろいろな経験をやってみて、子どもでは体験できないことでした。発表が、牛でよかったと思いました。(ゆうき)

「発表が牛でよかった」と思えたのは、聞き手の反応から、自分が得意としていることや夢中になっていることをみんなに認められたと感じられたからだと察する。そして、自分が得意としていることや夢中になっていることを認められることで、自分のよさに気付けたのではないだろうか。

#### 4. 2. 自分の家と比べて

3. 3で取り上げた授業では、「自分の家と比べて」という視点が弱かった。そこで、その後の発表では、「自分の家と比べて」の発言ができるようにながした。そのためには、同じところや違いを探しながら聴かなくてはならない。そのことによって、発表者への興味はいつそう高まりを見せた。

たとえば、味噌汁を作ったというのはなの発表。食材を切って入れたところを絵に書いていた。それを受けて、自分の家の味噌汁はどう作っているのか興味をもったひさきは、休日に作ってみようだ。

弟や妹の世話をこれまで当たり前のようにやっていたたけしやれんにも変化が見られた。りょうやみなが弟や妹の世話をし、家族に喜ばれたという発表を聞いて、自分を見つめ、比べて発言するようになったのだ。自分がやっていることは、お母さんを助けていること、妹やお母さんを喜ばせていることを再認識することができた。

ぼくが決めたほかほか大きくせんは、弟のお世話です。車に乗っていて弟が大泣きしたとき、なぐさめるのがいつも頼まれます。(たけし)

いつも頼まれることが誇らしげである。

いつも風呂あがりに妹の服を着せる。それがぼくの仕事です。風呂そうじもします。楽しいです。仕事が好きです。くつ洗いもしました。いつも楽しみ。

ぼくオムレツを作りました。とってもおいしかったよ。2回もおかわりしたよ。妹もたくさん食べてたよ。妹は喜んでた。

ぼくは、妹のおもちゃで遊んであげます。お母さんも喜んでくれた。ほかほかしたです。妹のお世話、楽しい。(れん)

「楽しいからやる」という感覚が素敵だ。

#### 4. 3. 発表の仕方を比べて

さらに、ほかほか大きくせんの内容だけではなく、発表の仕方を比べる子どもも出てきた。

何も持たずに発表するよりも、実物を示して発表する方が、みんなの興味をかき立てると実感したけんたろう。家から食器などを持ってきて、洗うところを実演した。自分なりに考え、工夫したことで相手の反応が変わることに気付き、満足げな様子だった。

自分が考案して、おじいちゃんとお父さんと魚釣りにいくというほかほか大きくせんを発表したひろき。本物を見ながら発表を聞くのは楽しいと実感していた。そこで、自分の発表でも本物を用意したかったが、難しいので、大変緻密な絵を描くことによって、聞き手をひきつけた。

いろいろな発表があったよ。ぼくは、本物は用意できなかったけど、絵を上手に描けたからよかったよ。

絵を上手に描くことができた自分のよさに気付くことができている。

#### 4. 4. 全員が一人ずつ発表したことで

このように、自分一人が全員からの注目を浴びる瞬間が約束されていることによって、必然的に自分を見つめる機会をもつことができた。全員が発表を終えたときに、振り返ってどうだったかをたずねると、ほぼ全員が発言をした。子どもたちの発言を抜粋する。

- みんながおたずねをして、いい意見がいっぱいだったよ。はじめ思ったより、やってみたら楽しかったよ。
- みんなと一緒にほかほか大きくせんができて、発表もできて楽しかったよ。
- 発表の時、みんながおたずねをして、いい意見がいっぱいだったよ。
- わたしは発表を聞きながら、メモをとりました。友達のことがいっぱいわかりました。
- 1Bのみんなが笑顔になったよ。
- 自分の発表が上手にできたと思いました。でもみんなの発表はもっともっと上手でした。
- 発表をして、自分がほかほかになりました。

一人で発表をしたことによって、緊張感とともにそれを支えてくれる友達の存在、あたたかさを感じ、集団で学ぶ喜びを感じられたようだ。そして、自分のこと、友達のことへの気付きが深まったことがうかがえた。

#### 5. 成果と課題

単元の学習を支えてくれた各家庭に依頼して、子どもたちに内密に手紙を書いてもらった。

それを開いたときの子どもたちの喜びははかりしれないものだった。「ありがとう」の言葉が胸に響いたのだろう。嬉しくて泣いてしまう子どももいた。

自分が考えて実行したことがうまくいったこと、自分が家族のために役に立てたことが実感でき、大きな自信になったようだ。



図9. 自然に笑みがこぼれる子どもたち

子どもたちは早速、返事を書いた。そこにもたくさん「ありがとう」があった。

・お母さんへ。お手紙ありがとう。お風呂がきれいになって、ぼくも嬉しいです。そして、楽しかったです。

・お母さん、手紙ありがとうね。また、遊ぼうね。お弁当作ってくれてありがとうね。また作ってね。学校は楽しいです。また、勉強も教えてね。楽しいからするよ。勉強。

・パパへ。いつも牛のお世話をして大変だね。ぼくの好きな牛、29-2A はやさしいから、友達が増え、40-3、12-3、いろいろな牛の友達が増えて嬉しいです。

・ママ、ほめ手紙ありがとう。ママが大変だから、手伝っているよ。りょうの心は、ママが喜んでくれたら、嬉しいよ。ママの弁当、いつもおいしいよ。ママ、りょうが応援するからね。

・母ちゃんへ。お手紙ありがとう。ほかほか大きくせん、ほめてくれてありがとう。

・ママへ。お手紙くれてありがとう。泣きそうなくらいだったよ。わたしも学校でもがんばるから、ママも仕事がんばってね。今日は夜、仕事がんばってね。パパへ。土日いつも遊んだりしてくれてありがとう。おばあちゃんへ。いつも折り紙やミルクのおむつかえをしてくれて、ありがとう。

・お母さん、寝坊したときにいつも学校に送ってくれてありがとう。これからも健康でいてね。

・おかあさん、お手紙ありがとう。ぼくは、ほかほか大きくせんが終わってもずっと続けるよ。お弁当、おいしかったよ。

1. 1. で記述した自分自身への気づきの③「自分自身の心身の成長に気付くこと。そしてその背後には、それを支えてくれた人々がいることが分かり、感謝の気持ちをもつようになること。」が返事の手紙の中に見て取ることができた。

また、単元を終えても、ほかほか大きくせんを続けている子が大半いることも嬉しい成果である。

一人で発表ができた自分、家族に喜んでもらうことができた自分に気付いたことで、自信や意欲が高まったのだと思う。

先生、あのね。洗濯物たたみをしてね。新しいたたみかたを見つけたよ。

またほかにも、新しいたたみかたを見つけないよ。

先生、あのね。わたしはほかほか大きくせんをおうちでするのが、毎日の楽しみです。

ほかほか大きくせん、次しようと思っているのが、お風呂そうじと洗濯物たたみです。

洗濯物たたみは、洗濯物を取り入れるお手つだいもしてみようかなと思っています。お風呂そうじでは、お風呂の床も、お風呂の中も洗いたいです。ほかほか大きくせんの発表はまたやってみたいなと思っています。

もし、もう1回ほかほか大きくせんの発表をしたら、今度は洗濯物たたみを発表してみたいです。

先生は子どものときは、どんなお手つだいをしましたか？

見通し、自分への期待感が感じられる。

ぼくは、トイレそうじをしたよ。きれいに洗えたから、ほかほかしたよ。しかも、ほかほかか2つあったよ。さっきゆったことと、もう1つは、お母さんに「ほかほかかした？」ってきいたら、「めっちゃほかほかかしたよ。」ってゆったよ。ぼくの（おたずねの）返事が気持ちよくゆってくれたから、ほかほかかしたんだね。

ぼくは9兆9億9万9千9百9十9ばい、ほかほかかしたよ。気がついたらトイレがきれいになっていて、気持ちがよくなってきて、すごくめっちゃほかほかかかあられてきたんだよ。

みんなで同じ課題に向かい、一人一人が少し背伸びをする体験をしたことで、自分自身への気付きは生まれた。

家族を対象にした単元では、一人で発表をさせることによって、教師のみとりと支援が適切にでき、学びをデザインする子どもたちの姿につながるということが分かった。

今後は、ほかの単元では一人で発表することをどのように位置づけていくと効果的であるかを研究したい。

#### (参考文献)

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領

(2013) 和歌山大学教育学部附属小学校研究紀要 No. 37